

機関番号：10101
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22720031
 研究課題名（和文）
 郭店楚簡と戦国諸子思想の研究
 研究課題名（英文）
 The study on excavated texts from Guōdiàn and philosophy of Zhan guo period's philosophers
 研究代表者
 西 信康（NISHI NOBUYASU）
 北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員
 研究者番号：30571062

研究成果の概要（和文）：

本研究課題は、古代儒家思想における人性論の歴史的展開と、儒家道家の思想交渉の歴史的展開に関する研究を進めた。具体的には、(1)『孟子』所載の仁内義外説を再検討し、「義」に対する告子の倫理思想を明らかにした。(2) 郭店楚簡『性自命出』に見える「性」「命」「勢」「物」といった概念の意味内容と比喻表現を再検討し、その思想的特徴を明らかにした。(3) 上博楚簡『民之父母』に見える「五至」について、『老子』『莊子』『淮南子』の記載を手がかりにその意味内容を検討し、儒家と道家の思想的交渉の様子を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

This Study has conducted a research into the concept of human nature, the historical process of relationship between Confucianism and taoizm in ancient China. Concretely, (1) It has reconsidered the Gao-zi (告子)'s theory of "Ren nei Yi wai" (仁内義外), and has comprehended new fact which connected with the Gao-zi (告子)'s ethical thought on Yi (義). (2) It has reconsidered the content of a philosophical terms *Xing* (性)、*Ming* (命)、*Shi* (勢)、*Wu* (物), of a rhetorical explanation in *Xing Zi Ming Chu* (『性自命出』) of the Guodian Chu Bamboo Slips (郭店楚簡), and has comprehended the philosophical quality. (3) It has researched a philosophical terms *Wu Zhi* (五至) in *Min Zhi Fu Mu* (『民之父母』) of the Shang Hai Museum Chu Bamboo Slips (上博楚簡) through the mention of *La ozi* (『老子』), *Zhuangzi* (『莊子』) and *HuaiNanzi* (『淮南子』), and has comprehended the state of relationship between Confucianizm and taoizm.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	18,000	618,000
2011年度	500,000	15,000	515,000
2012年度	400,000	12,000	412,000
年度			
年度			
総計	1500,000	45,000	1545,000

研究分野：思想史

科研費の分科・細目：東洋・日本思想史

キーワード：中国思想

1. 研究開始当初の背景

本研究は、郭店楚簡と古代中国の諸子百家の思想を研究対象とする。

郭店楚簡とは、一九九三年に中国湖北省荆門市の郭店一号墓から出土した竹簡資料である。郭店楚簡には、『老子』甲・乙・丙本や『緇衣』のように、今日まで伝わる文献とその内容が対照可能な文献や、『五行』など、これまで存在が知られていなかった古佚書が含まれていた。これにより、郭店楚簡は、従来の文献によって組み立てられた思想史の間隙を埋める新資料として注目された。多くの研究者にとっては、その思想的立場、伝世文献との対応関係、文献相互の思想的影響関係を導き出す思想史的研究が興味の対象となった。出土から16年余りの年月がたった今日、年数の経過と、新たに上海博楚簡が発掘・公開されたこともあり、郭店楚簡の研究には、かつてほどの盛況は見られなくなったようである。とはいえ、解決されるべき課題は、なお残されている。

その課題の一つとして、西（本研究代表者）は、これまで郭店楚簡『五行』（以下、郭店『五行』）の研究に取り組んできた。従来、郭店『五行』の研究においては、『孟子』や、孟子学派の著作とされる『礼記』中庸篇、大学篇、或いは、その他の戦国諸子文献との内容の類似が指摘され、その学派分けや思想的な先後関係が追求されてきた。中国においては、孟子学派との関係を指摘する研究が大半を占めた。国内では、浅野裕一「『五行篇』の成立事情—郭店写本と馬王堆写本の比較—」（2003）が孟子学派との関係を指摘し、池田知久「郭店楚簡『五行』の研究」（1999）は、孟子に限らない戦国諸子思想との関係、とりわけ『荀子』との関係を指摘した。

だが、郭店『五行』と『孟子』等伝世文献との間に、比較可能な内容が確認されたとしても、その追求を目指す研究者の関心とは別の所に、郭店『五行』独自の思想的主題が存する可能性はのこされていた。

西は、博士論文「郭店楚簡『五行』研究」（2009）において、郭店『五行』の竹簡に付された特殊符号に着目し、郭店『五行』の構造分析を進めた。その結果、郭店『五行』の構造的特徴として、この文献が計三つの段から構成されることを指摘した。そして、従来の研究の多くが思想史の再構築、学派区分といった関心によって研究を進めるのに対し、西は、郭店『五行』の構造的特徴に即して考察を進めた。これにより、従来の関心では把握すること

のできなかった郭店『五行』の三つの思想的主題を、新たに把握し直すことができた。

その思想的主題とは、一つは、「心」や「思い」を専一にすることで、「仁」「智」「聖」といった徳目を体得し、その徳性を他者の目に見え、耳に聞こえる形に顕わすことを目指す「専心内形論」である。西の構造分析の結果に即して言えば、これは郭店『五行』第一段目の思想的主題である。二つめは、「見てこれを知るは、智なり」「聞いてこれを知るは聖なり」という、知的判断力を定義する「聖智論」。この「聖智論」という言葉は、かつて邢文「楚簡《五行》試論」（1998）が郭店『五行』の思想的特徴を指摘する際に用いたものである。西の構造分析の結果に即して言えば、これは、第二段目の思想的主題である。そして最後の一つは、血縁的連帯意識に束縛されない、能力主義の賢者登用を主張する思想、「尊賢論」である。

2. 研究の目的

郭店『五行』に関するこうした思想は、その所属学派や、他文献との思想的な先後関係を定める、という関心とは別の視点によって、はじめて把握できるものであった。西は、上述の研究成果によって、郭店『五行』のみならず、他の郭店楚簡に含まれる文献や、他の出土資料、更には、伝世文献に対しても、同様の視点による研究の必要性を感じるに至った。

本研究の目的は、『孟子』、上博楚簡『民之父母』、郭店楚簡『性自命出』といった資料を対象に、それぞれの文献の思想的特徴を把握し、古代中国思想史の再検討のための基礎作業を推進することにある。

3. 研究の方法

そもそも、郭店楚簡が子思・孟子学派の思想を伝える文献と見なされたのは、子思の著作として伝わる『礼記』中庸篇や、『孟子』等の諸文献との間に、思想上の関連が認められるからである。本研究は、改めてその思想上の関連性を批判的に考察し、その具体的様相を把握する研究を進めた。

具体的には先ず、『孟子』を研究対象に選び、そこに見える告子の仁内義外説について検討した。そこでは、先行研究の整理を行った上で、問題の所在

を明らかにし、『墨子』経説下篇、『管子』戒篇、『礼記』喪服四制篇といった伝世文献と、郭店楚簡『六德』、同『語叢一』といった出土資料に見える仁内義外説に関連する記載を改めて検討した。その上で、それぞれ独自の思想内容を解明した。

ついで、『上海博物館蔵戦国楚竹書(二)』所収の『民之父母』という竹簡資料を対象とし、その思想的特徴の解明と、儒家思想と道家思想との思想的交渉の実体解明を目指した。そこでは、『老子』『荘子』『韓詩外伝』『淮南子』といった文献を考証の材料とした。

ついで、郭店楚簡『性自命出』を研究対象とし、その思想的特徴の解明と、古代儒家思想における性説史上の位置付けを試みた。そこでは、『荀子』郭店楚簡『語叢二』『孟子』『論衡』といった資料を考証の材料とした。

4. 研究成果

(1) 『孟子』に見える告子の仁内義外説の研究

『孟子』告子上篇には、「仁」「義」の「内」「外」を問題とする議論がある。その議論の中で、告子という人物は、「仁」は「内」であり、「義」は「外」である、とする「仁内義外説」を主張した。その議論の直接の争点は、告子の提起する仁内義外説であり、より正確に言えば、その義外説である。これまで、告子の義外説に対しては、実に様々な関心や問題設定に基づく研究が進められ、様々な表現による解釈が施されてきた。西は、仁内義外説に関する我が国の諸研究を再検討し、従来の研究には二つの観点とそれに対応する解釈が見出されることを指摘した。それは、次のようなもの。

①、告子の義外説は、「義」の実践が自律的であるのか他律的であるのかを問題とし、「義」の実践が他律的であり強制的であることを主張するもの、とする解釈。

②、告子の義外説は、本性論との関連で、「義」に対する判断力や実践力が本性に内在するかしない(外在)かを問題とし、「義」の外在即ち後天性を主張するもの、とする解釈。

こうした二つの観点を告子の義外説に対して想定し、それに基づく解釈を導き出すことの妥当性に対し、西は疑問を呈する。そして、上記①や②の観点から告子の仁内義外説を説明するの

ではなく、仁内義外説にはそうした観点と別に、独自の思想的意義が存することを想定した。その上で、仁内義外説に見える比喩表現の内容を改めて検討し、その思想内容を解明しながら、仁内義外説を解釈した。その際には、『孟子』以外の戦国諸子文献において、「仁」と「義」とが「内」と「外」という概念で論じられるときの問題意識の一般的状況を確認した。

考察の結果、従来の解釈は、孟子の思想に対する解釈を図式的に反転させたものとして、告子の思想を解釈していることを指摘した。そして、告子が示す比喩表現の意味内容を再度検証するならば、その義外説とは、客観的に認識される「白さ」や「長さ」といった物の属性に「義」を重ね合わせることで、「義」の規範としての客観性を証明したものである、との結論を得た。

(2) 『上海博物館蔵戦国楚竹書(二)』所収の『民之父母』の研究

『上海博物館蔵戦国楚竹書(二)』所収の『民之父母』は、その内容の一部が伝世文献の『礼記』孔子閑居篇や『孔子家語』礼論篇等と重なることで知られている。また、この竹簡資料には、『礼記』等の伝世文献との間に、文字の異同が見られることも既に指摘されている。

その異同の一つとして、『民之父母』に「物之所至、志亦至焉」(物の至る所、志もまたここに至る)とある一文は、『礼記』孔子閑居篇では、「志之所至、詩亦至焉」(志の至る所、詩またここに至る)に作ることが知られている。現在までのところ、この字句の異同に関しては、二つの考え方が存する。一つは、『礼記』等の伝世文献の字句をもとに、『民之父母』の字句を改めるもの。もう一つは、『民之父母』の字句を改めず、現存の字句に従い、合理的な解釈を模索しようとするものである。

本研究は、第二の考え方を踏襲し、この文献の思想的背景を探り、併せて一文の表現形式を詳しく分析し、新たな解釈を模索した。

その結果、『民之父母』を理解するためには、その思想背景として、道家の「無」の思想及び、礼楽批判の思想との関係を考慮する必要があることを指摘した。そして、該当句の表現形式に関しては、他文献の用例に基づき、「所」の字を正しく理解する必要があること

を指摘した。こうした手続きを踏むことで、文字を改めることなく、「物之所至、志亦至焉」という一文に対し、新たな解釈を提示した。

(3) 郭店楚簡『性自命出』の人性論の研究

郭店楚簡『性自命出』は発見以来、『礼記』中庸篇や同楽記篇等との思想上の類似点が指摘され、その成書年代や所属学派が議論されてきた。一方、我が国においては、その研究の初期段階から、中庸篇との思想上の相違点がいち早く指摘された。そうした研究によって、当文献の思想内容を理解する上で鍵となる「性」「心」といった主要概念は、漸くその独自の意味内容が明らかになってきた。

だが、その一方で、それら主要概念の意味内容に関しては、より具体的な説明を試みる余地が、なお残されていた。そこで、本研究では、『性自命出』に見える「性」「命」「心」「物」や、「善」「不善」及び「物」「勢」といった概念について、これら概念を繞る比喻表現や文章構造を改めて検討し、その意味内容を検討した。その上で、『性自命出』の人性論は、人間を支配する必然的な因果法則と、人間の主体的な判断を可能にする心の自由の領域とを区別し、後者に人倫規範の根源と価値とを見いだす思想であることを指摘した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

- 1, 西信康「郭店楚簡『性自命出』の人性論とその周辺—主要概念と比喻表現の再検討」(『中国—社会と文化』第27号, p108-p125、2012年7月、査読有り)
- 2, 西信康「戦国竹簡に付された特殊符号の形態とその時代性及び地域分布に関する研究」(『高梨学術奨励基金年報 平成22年度研究成果報告』財団法人高梨学術奨励基金、2011年11月、p14-p19、査読無し)
- 3, 西信康「試論上海簡《民之父母》中の“物之所至者、志亦至焉”」(『2011年国際漢語修辭学会予稿集』、2011年10月、査読無し)

- 4, 西信康「『孟子』に見える告子の仁内義外説」(『中国哲学』第38号、2010年11月、査読有り)

[学会発表] (計2件)

- 1, 西信康「試論上海簡《民之父母》中の“物之所至者、志亦至焉”」(2011年国際漢語修辭学会、於札幌大学、2011年10月29日、査読無し)
- 2, 西信康「郭店楚簡『性自命出』の研究」(北海道中国哲学会1月例会、2011年1月28日、於北海道大学、査読無し)

[図書] (計1件)

- 1, 西信康著『郭店楚簡『五行』の研究—伝世文献と新出土資料』(北海道大学大学院文学研究科叢書、北海道大学出版、2014年、3月出版予定)
- 2, 林啓屏著、近藤浩之・西信康共訳「儒教思想における知行観—孟子を中心に論ず—」(佐藤鍊太郎・鄭吉雄編著『中国古典の解釈と分析』(北海道大学出版会、2012年3月、p233-p254)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西 信康 (NISHI NOBUYASU)
北海道大学・大学院文学研究科・専門研究員
研究者番号：30571062

(2)研究分担者 ()

研究者番号:

(3)連携研究者 ()

研究者番号: